

成分名	カンゾウ
英名	Glycyrrhiza
CAS No.	—
収載公定書	日局

投与経路	用途
経口投与	甘味剤、矯味剤

## 1. 単回投与毒性

動物	投与量	結果
マウス: ddY 系雄マウス (20g 前後) 1 群 5 匹	経口 6g/kg	一般状態に異常はなく、死亡例もみられなかった。剖検では肉眼的異常はみられなかった。 <sup>1)</sup> (Tanaka et. al., 1986)
	腹腔内 6g/kg	投与後 10 分頃から鎮静症状(自発運動の抑制、腹部着床 状態)を示し、死亡前 2-3 分間強直性痙攣を繰り返し、投与後 2 時間以内に全例死亡した。 <sup>1)</sup> (Tanaka et. al., 1986) *投与液は、凍結乾燥甘草エキスを注射用蒸留水に溶解または懸濁し、調製した
ラット: Wister 系雄ラット (165g 前後) 1 群 5 匹	経口 6g/kg	一般状態に異常はなく、死亡例もみられなかった。剖検では、肉眼的異常はみられなかった。 <sup>1)</sup> (Tanaka et. al., 1986)
	腹腔内 6g/kg	投与後 10~20 分から鎮静症状(自発運動の抑制、腹部着床状態)を示し、投与後 6 時間以内に全例死亡した。 <sup>1)</sup> (Tanaka et. al., 1986) *投与液は、凍結乾燥甘草エキスを注射用蒸留水に溶解または懸濁し、調製した。

## 2. 反復投与毒性

### 2-1 ラット

1 群 7 匹の Wister 系雄ラット(210g 前後)に、1.5g/kg および 3g/kg の投与液を 21 日間 連続経口投与した。投与液は凍結乾燥甘草エキスを注射用蒸留水に溶解または懸濁し、調製した。対照群には注射用蒸留水 5mL/kg を同様に投与した。尿検査では、尿の色調は濃い黄色を呈した。

尿量は減少傾向を、浸透圧は上昇傾向を示したが対照群と比べ有意差はみられなかった。尿蛋白量は用量依存的に増加し、尿中 NAG 活性は高用量群で増加傾向がみられた。血液学的検査では、RBC 及び Ht は低用量群、高用量群ともに減少した。Hb は低用量群で減少した。また、MCH 及び MCHC が増加し、RDW が高用量群で減少した。血液生化学検査では、血清 F-CHO が減少し、血清  $\gamma$ -GTP の増加ないし増加傾向がみられ、血清 UA、Ca、Pi および K の減少が認められた。肝 ALP 及び ICDH の増加ないし増加傾向がみられたが血清レベルでは特に変化は認められなかった。また、蛋白含量、NADPH cyt.c red 活性がそれぞれ 27% および 69% 増加した。また Cyt.P450 含量およびエトキシマリン脱エチル化活性に増加傾向がみられた。器官重量は、腎臓の実重量および比重量が高用量群で増加した。その他、一般状態および自発運動量、体重、剖検所見および病理組織学的検査には異常は認められなかった。<sup>1)</sup> (Tanaka et. al., 1986)<sup>1)</sup> (Tanaka et. al., 1986)

以下については該当文献なし

3. 遺伝毒性
4. 癌原性
5. 生殖発生毒性
6. 局所刺激性
7. その他の毒性
8. ヒトにおける知見

#### 引用文献

1) Tanaka S, Takahashi A, Onoda K, Kawashima K, Nakaura S, Nagao S, Ohno Y, Kawanishi T, Nakaji Y, Kobayashi K, et al. Toxicological studies on biological effects of the herbal drug extracts in rats and mice. II. Moutan bark, Glycyrrhiza and Bupleurum root Yakugaku Zasshi. 1986 Aug;106(8):671-86.